

悲歌に血吐きし

(昭和三十年寮歌)

柳田和朗君 作歌
菅原幸雄君 作曲

序

悲歌に血吐きし我らもが
永劫不変を求めんと
遙々漂泊来たりても
赤き浜茄子摘みとりて
悪魔牛耳り詩吟する
天下不仰の寂寥児

春

未知の世界に立ち薫る
冬の名残りか歡喜か
春爛漫のただなかに
手稲の山の淡雪の
雪解が衣の袖軽ろき
門出が詩歌を讃歌わんや

夏

原始の森に深く入り
朱碧混じる眩さに
神秘無象の影さして
郭公生命の顫律で
若き誇りに酔い痴れて
自由の頌歌歌うなり

秋

朝の白露は詩を吟じ
夕陽紅く舞い乱る
秋風高歌昂然と
踏轟ろかすストームの
孤袖の遊子大望の
希望に宿る北極星

冬

雪崩に雪を血で染めて
若き生命を捨つとも
あこがれ清淨き樹氷恋い
奥山古き谷間小屋
空想の羽の頂上に
炉火囲み唱う歌

結

年古る樹々は皆朽ちて
生の心が落葉の
記憶の底に沈みいで
悲哀の涙ほとばしる
世の暗闇にひそめども
去る二年を謳歌えんや